



2020年9月13日主日礼拝説教

日本同盟基督教団 クリスチャンプレイズチャーチ

【 神様に喜ばれ祝福される家庭 】

聖書の本文:使徒の働き10章1-8・22-35節/ 今週の暗唱聖句:ルカ10章27節

説教者:鄭南哲牧師

(Rev.Jung nam-chul)

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！秋雨が続き、気をつけば、もう朝晩秋のような涼しさを感じる一週間、みんなお元気でしたか。

<感謝のウイルスを広めるクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族>

今年世界的にコロナによる死亡者が90万人を超え、世界感染者2千8百万人ほどで、今年7月までの日本内で完全失業者数は197万人であり、265万人まで失業する見通しの中、隠れ失業者数は、リーマンショック時に355万人より、上回る517万人ほどとなりそうという推計もするうれしくないニュースばかりのような気がします。

そのため、今コロナウイルスの時代、「コロナブルー」と言われるコロナうつ症状を訴えている人々多いのではありませんか。なかなか以前のような人との会話も、交わりもないさみしさと孤独、これからの先のことが予想出来ない、読めない将来への不安と恐れのためにうつ症状が増えていると言われていています。なので、今年は特に、なかなか感謝することが少ないし、出来ない今年かも知れません。しかし、愛する信仰の家族のみなさん！コロナウイルスを通して、今まで当たり前だった事がどれほど感謝だったのかも悟られ、教えられているのでもありませんか。

ご自身と家族、子供たちの命と健康が今日まで守られていることは決して当たり前ではなく感謝すべきであり、多くの方々失業し、廃業している中にもかかわらず今年もここまで働くことが出来たことも当たり前ではなく感謝すべき理由の一つではありませんか。以前より仕事が忙しすぎてないことで、今まで忙しすぎてなかなか取れなかった家族と、子供たちとの時間を取れるようになったのも、どれほど大切に感謝なのか改めて教えられています。そして、決して自分、うちだけではなく、共に礼拝し、牧場参加の機会が増え、一層共に支えられ、交わることもどれほど感謝なことでしょうか。

家族や子供、周りの人々にむやみにしゃべりすぎた言葉を減らし、静まって神の御前でもっと祈る時間、もっと御言葉を黙想しながら神様と親しく交わる時間が以前より増えていることも感謝でしょう。コロナの時代、コロナウイルスに負けず、心と体が守られて行く為コラムにも書いたように、感謝のウイルスを、感謝の言葉を、感謝の心を散らし、広めて生きることが真のクリスチャンの信仰と生き方だと信じます。

アメリカ・ノースカロライナ州にあるデューク大学は、全米総合大学ランキングにおいて常にトップ10入りする世界屈指の名門大学です。その大学病院のヘロルド・ケヒニ、デイビット・ラーソン教授は、1998年、長年検査の結果を通して、「毎日感謝しながら暮らす人はそうじゃない人より、平均7年もっと長く生きられる」と発表しました。アメリカのジョン・ヘンリという博士は、「感謝こそ、神が人に与えて下さった最高の抗癌剤であり、解毒剤、防腐剤だ。」と言われました。それほど、人が感謝し、喜ぶと身体の免疫体系が強化されるという話でしょう。みなさんが、今日も1分間喜んで笑い、感謝すると、体内に24時間免疫の力が生じ、1分間イライラしながら怒ると6時間の間免疫体系が破壊されるとも言われています。イスラエル民族の知恵の本と呼ばれるタルムードでは、「この世の中で一番愛される人は、いつも人を褒めてあげる人であり、一番幸せな人は感謝する人だ。」と書かれています。神様は我らに「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことにおいて感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。(テサロニケ第一5:16-18)」聖書を通していつもキリスト・イエスにとどまりつつ、すべての事において、感謝する事を命じて下さっています。

“あなたのことをいつも感謝しています！”、“あなたの為、いつも主に感謝しています！”今みなさんの隣にいる方に話して下さいませんか。

先週まで、10週間にわたって我々は神の十戒の戒めを通して、神に祝福される幸いな家庭への10戒の内容を共に学ばされました。神様が備え与えようとする全ての祝福を自分の家族に、関わっている信仰の共同体の家族に実際のものとして、受け継がせる為に、神の前で決してやってはならないことや必ず、やり行うべきことの神様が明確に示して下さいました。その境界線を知り、従って守ることの大切さを共に学ぶことが出来ました。

今日は、実際、その神を信じ、神を愛し、神の戒めを実際守り行って祝福され、大いに用いられた聖書の中で、ある家庭の事例を共に学びたいと願います。その家庭の姿を通して、ただ、神の戒めを学んで終わってしまうのではなく、我ら自身も、全てのCPC家庭もその家庭を模範として実践し、行って同じ神の祝福に頂き、大いに用いられる全家庭となりますように切にお祈り申し上げます。

1984年ギネスブック(Guinness Book)に世界で一番離婚をたくさんした人としてスカートウィフという人が登場しました。彼は26回目離婚をして、27番目の妻を捜しているとのこと。彼は1994年度に死にましたが、臨終(りんじゅう)の前にある友達が彼にこのように聞いたそうです。“あなたの生涯において後悔があるのか。”すると、彼はこう答えたそうです。“もし僕がもう一度人生を生きることが出来るなら、僕は一人の妻とずっと一緒に住みたい。僕には本当の家族と言える存在がいなかったから”と。つまり、自分に快樂する多くの女はいましたが、一生自分の良い場所、暖かいホームの存在も、そういった経験もなかったというある人の寂しくて悲しい話ではないでしょうか。

むかし、世界を制覇(せいはい)していたローマ帝国が滅ぼされた原因の一つは不道德な倫理と家庭の崩壊だったということは、すでに多くの歴史家たちによって指摘されたことです。ローマの家庭の崩壊とともに歴史が崩れ去っていくその最後を見ながら、ローマのある哲学者は“愛国者よ。家庭を守りなさい。ローマ富強(ふきょう)は神を恐れ、家庭を大切に
する伝統にあった。”と訴え、“神よ。祈る家庭をローマにもう一度立たせてくださいますように。”という祈り文を残したそうです。

今日はコルネリウス(新改訳3版コルネリオとも書かれている)という人の家族がどうやって神様に喜ばれ、祝福されたのか調べ、我々も同じように神様からの祝福をいただけるように切にお祈り申し上げます。今日の聖書本文にはすばらしく神様の祝福をいただき、経験したコルネリウスというローマ人の家庭について記録されています。彼は決して選ばれたイスラエル人でもなく、大人になるまで聖書の創造主の神様について、御子イエスキリストについてまったく聞いたことも、周りに信じていたクリスチャンがほとんどいなかったのに、どうやって神様に愛され大いに祝福される家庭となられたのでしょうか。

<1. コルネリウスは神様を恐れる信仰を持っていたからです。(2節)>

①神を恐れかしこむ信仰を持ったローマ百人隊長コルネリウス

今日本文の2節を見て見ると、「彼は敬虔な人で、家族全員とともに神を恐れ(かしこみ)、民に多くの施しをし、いつも神に祈りをささげていた。」と書かれています。コルネリウスは神様をただ信じたのだけでなく、神を恐れかしこむ(2節)人でした。

しかし、コルネリウスという人は、イスラエル人ではない異邦人でした。つまり、彼はクリスチャンの家庭で育てられたこともなく、聖書についても全然聞いたことがなかったかも知れません。当然、周りには神様を信じていた人もほとんどいなかったはずですが、コルネリウスはローマ軍隊の指揮官でした。少なくとも100人以上の部下をもっている軍隊の隊長(たいちょう)の一人として紹介されています。今日は100人ほどの軍人を持っていることは、部隊の中でそれほど高い地位の人ではないかも知れませんが、当時ローマからパレスティンに派遣されている軍隊の百人隊長くらいの身分と立場は、相当の高い地位の人だったのに間違いありません。それだけではなく、コルネリウスは自分たちが征服した、つまり被征服地(ひせいふくち)であるイスラエルという国の民が信じていた神様を信じていたわけであります。

みなさん、一般的には、征服した国の人たちが征服されている人たちに、自分たちの持っている宗教や文化などを持ち込み強制的に、信じさせ、征服された人々が仕方なく、征服した人たちの宗教や文化に従うのが一般的ではないでしょうか。例え、昔日本の朝鮮半島を攻撃し、36年間治めていた時、宗教による一元化となることを願い、韓国各地で神社を建て、神社参拝を全ての人々に強制的にさせましたが、その中、特にクリスチャンの方々は真の神以外には、偶像崇拜をしてはならない聖書の御言葉に従い、いのちをかけ、最後まで拒否し断った為、全国的に2千人以上のクリスチャンたちが投獄され、その中50人ぐらいの牧師は投獄中、激しい拷問(ごうもん)を受けても妥協しなかったため、結局殉教の道を歩まれた韓国教会の歴史があります。その中で、韓国で有名だった朱基徹(ジュギチョル)牧師(1897-1944)は、神社参拝の拒否を続けて1944年4月13日投獄中殉教される時まで、5回投獄され、耐えがたい拷問により、結局殉教されました。ジュ先生が投獄され召される前の最後の教会での説教が、今日も韓国でよく知られているあの有名な「一死覚悟(いっしかくご)」という説教でした。「信仰を正しく最後まで守るために、もし死ぬことがあっても真の神様を裏切りません。人が一度死ぬことがみんな決まっているので、私は聖書で神様が言われた十戒の御言葉通り、真の神の以外には、人が作り上げたどんな神々にも、偶像崇拜の罪は死んでも決してしません。」という証しが含まれていました。

当時、ローマ帝国はイスラエルを含め、征服した国々の宗教や文化などわりと、自由を与えたとしても、それだけではなく、ローマを体表してイスラエルに派遣されていた百人隊長が自分たちの征服した国の人々が信じている神様を信じるということは決して当時は、あり得ないことであり、それだけでも軍人たちのプライドが傷つけられ、自分にいろんな面においてマイナスだったのに間違いありません。自分のローマの武力(ぶりよく)に踏みにじられ、生かされているユダ民族の姿が征服者ローマの指揮官の目では、どれほど弱そうで、みすばらしく見えたのでしょうか。

それにもかかわらずローマの百人隊長コルネリウスは、イスラエルの民の中で彼らが信じていた天と地を創造された神様、その神様は間違いなく真の神様であられることを正直に認め、信じました。それだけではなく、神を恐れかしこむ信仰を持っていたというのは、必ず、信じている神様は生きておられ、私の人生の全ての行いをも、心をも、生きておられる神様はすべてを見ておられ、知っておられる全能なる神様であられることを信じていたという意味です。その神様は罪を犯す者には正義と公義を持って必ず懲らしめ、悔い改める者には憐れみ深く赦して下される恵みの神様であられることをはっきり信じていたという意味でもあります。ですから、コルネリウスは自分の人生がその生きておられる神様の前の全生涯であることを彼はいつも忘れなかった為、常に神様を恐れつつ、信じていたのではありませんか。

ローマの百人隊長だったコルネリウスは軍人として、将軍として、どれほど数多い生死の分かれる戦争場を体験して来たのでしょうか。どれほど多くの血を流し、多くの亡くられる人の命を目のあたりにしたのでしょうか。結局今回は勝っても、いつか負ける時もあり、いつか死を迎える時が来るのではないか、人生の生死とむなしさをだれよりも体験したと思われ

ます。一生懸命戦う準備をしても勝つ時もあれば、負ける時もあり、人生の限界をつねに感じながら、絶え続戦いへの人生の疲れ、限界、不安と恐れを常に感じていたのではありませんか。大切にされて来た部下の命が失われる姿を見ながら、今しばらく勝ったとして喜ぶのもそんな大したことでもなく、今しばらく高い地位が上がっても、世の中で手に入れている権力、武力、身分、出世などのものなどに執着してなかった人のように見えます。血まみれの戦争場で、彼はみんなが頼っていた勇士であり、指揮官でしたが、実は、心の中では、もし戦争の神の存在がいらっしゃればどうか今回も、我らを助け、守って下さるよう、知らない絶対者な存在の神様にどれほど求め、祈って来た人だったとも考えられます。

イエス様が言われたように、コルネリウスは表では軍隊の指揮官のような戦いには自信満々そうな立場で、自分の高い社会的身分にもかかわらず、神という存在の前では心の飢え渴きを持っていた正直で、謙遜な人でした。いつ神を信じたのかは詳しくは聖書では書かれてないですが、きっと、イスラエルの民が信じている真の唯一な創造主神を旧約聖書を通して調べ、そして、詳しくはわかりませんが、イエスキリストの出来事もうわさで聞き調べながら、聖書の神様こそ、自分が探し求めた真の唯一の神様であられることを恐れつつ信じた神様の御前で素直で、謙遜な人だったのか推し量ることができる部分です。コルネリウスは偏見や自分のプライドより、神の前でとても自分の弱さ、限界、そして、征服したイスラエルの人々が信じる神かどうかのような周りの環境や周りの人々も関係なく、彼は聖書で書かれている御言葉が神の御言葉であることと、御言葉通りに、素直にそのまま神を信じていたことが分かります。

そのように神を信じていたコルネリウスについて聖書は敬虔な人(彼は敬虔な人で)だったと紹介しています。

彼は神様を信じた年数は他の人々より、きっと短かったと思われませんが、彼は、神様を恐れかしこむ信仰をもっていたと聖書で神様は評価しています。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族みなさん！みなさんは、今も神様は生きておられることを信じていますか。みなさんはその神様を恐れながら、信じていますか。わたくしだけかも知れませんが、今日の多くのクリスチャンの方々は、目に見えないですが、はっきり生きておられる神様を恐れつつ信じるよりも、目に見えないコロナウイルスをもっと恐れているような気がします。決してコロナ軽く考えたり、無視する意味ではありません。人の生死だけではなく、たましい全てを治めておられる神様の前では、神を恐れ徹底的に聖書の御言葉通り従って守り行おう必死に努力しないで、自分勝手な信仰を持ちながら、いくら聖書が教えても気が向いたら従ったり、すぐ神の存在も、神の御言葉も忘れがちで、自分勝手に生きているのに、コロナウイルスはどれほど人が恐れすぎているのか、どれほど細かいところまで徹底的に予防し守ろうとしているのでしょうか。まるで、神様よりもコロナを恐れているような気がするのは私だけでしょうか。

もし、今我らに物事がうまく行かないのは、神様の問題ではなく、明確に、生きておられる神様を恐れつつ信じ、徹底的に神の御言葉通り従って行っていない我らの姿勢、生き方、思い方が問題ではないでしょうか。

神様を信じると告白しながらも、神様の前で、いまだにあきらめてない、やめてない罪はないでしょうか。

神様を真剣に正しく信じるということは、神を恐れかしこむことです。私は、今日、実際神の御言葉なる聖書の力と御約束と祝福を、祈りの答えと力を体験出来ない理由は、神様にあるのではなく、神様を恐れかしこまない、神様をかるく信じようとする我らの勝手な信仰の姿勢と生き方に問題があるのではないか自分自身の信仰を、すべてを知っておられる神の御前で自分を真剣に振り返って見なければならぬと信じます。

ヨブ記37章24節「だから、人々は神を恐れなければならない。神は心に知恵ある者を顧みられないだろうか。」

詩篇67篇7節「神が私たちが祝福してくださり地の果てのすべての者が、神を恐れますように。」

伝道者の書3章14節「私は、神がなさることはすべて、永遠に変わらないことを知った。それに何かをつけ加えることも、それに何かを取り去ることもできない。人が神の御前で恐れるようになるため、神はそうにされたのだ。」

伝道者の書12章13節「結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。」

これが人間にとってすべてである。」

黙示録14章7節「神を恐れよ。神に栄光を帰せよ。神のさばきの時が来たからだ。天と地と海と水の源を創造した方を礼拝せよ。」

今日の本文**35節**で、神は使徒ペテロを通して、コルネリウスにこう語って下さいました。「**どこの国の人であっても、神を恐れ、正義を行う人は、神に受け入れられます。**」

もう一度自身の信仰を生きておられる神様の前で出してみませんか。神様を恐れかしこむ信仰を保つことこそ、自分の人生と家庭が揺らぐことなく、守られ、家庭が祝福される道のりであることをしっかり抱き歩みましょう。

②全家族が共に神を恐れ信じていたコルネリウスの家庭

「彼は敬虔な人で、家族全員とともに神を恐れ(かしこみ)、民に多くの施しをし、いつも神に祈りをささげていた。」

そして、このコルネリウスという人の家庭は「全家族とともに神を恐れかしこんでいた」と記録されています。

みなさん、全家族が神を信じるこの祝福がどれだけ大きいのかご存知ですか。そして、それにみなさんは神を家族がみんな共に信じる事がどれほどの祝福であり、それに感謝していますか。一人で、もしくは家族の中で一部だけ教会に通っているみなさんがいらっしゃるなら、いつかはかならず全家族が共に神様を信じ、恐れかしこむ家庭となるように、あきらめず祈り続けるみなさんとなりますように切にお祈り申し上げます。

最初は、お父さんコルネリウスが先に信じたと思います。ところが、この神様は間違いなく、神のみを信じる決心をされたら、彼は、すぐ家族にも分かち合い、伝え、共に家族全員が神を信じ、神を恐れかしこむ信仰を保っていたことが分かります。

本当の神様が生きておられ、神を信じるすべての者は祝福され、全ての罪が赦され、救われるのを確実に信じたコルネリウスは自分だけではなく、愛する妻、子供たち、家族全員も神を信じ、神に救われ、神に愛され、祝福されることが人生の中で一番優先すべき関係であり、大切なことであると確信したため、迷わず、すぐ家族にも分かち合い、伝え、全家族の神を恐れ信じていたことが分かります。みなさんは、神を信じるのが人生を変わり、守られ、必ず祝福されるのに間違いないと確信しているでしょうか。そしたら、自分だけではなく、みなさんの子どもたちや、家族、そして、兄弟姉妹に真剣に証しし伝えているでしょうか。伝えてくれる者がいないのに、聞いたことのないのに、どうやって真の神を知り、信じる事が出来るでしょうか。

コルネリウスのように、我らの教会の中でもクリスチャンホームが一世代目の家庭がほとんどです。

だからこそ、今まで聞いたこともなかった聖書の神様について、すぐ信じる事は相当の時間がかかるかも知れません。忍耐と犠牲が必要だったかも知れません。しかし、みなさん、希望を失わず、必ず、家族みんなが真の神を信じ、キリストを受け入れ救われる神の恵みにあずかる日がやがて来ることを信じて下さい。

神様には我々一人一人、個人だけではなく、一つの家庭を救われようとするご計画があります。それによって、キリストを信じる信仰は個人的な範囲を越えます。神様は一人一人個人をも愛しておられます。今日もみな様一人一人をいつくしみ深く変わらない永遠の愛を持って愛しておられます。しかし、神様はもう一歩すすんで、みなさんを愛しておられるというのは、神様はみなさんの愛する家族をもともに愛しておられ、哀れんで下さっている証拠ではありませんか。みなさんを愛するがゆえに、御子イエスキリストを心に受け入れる信仰による救いを与えて下さった慈愛の父なる神様は、愛するみなさんの家族をも救いへの道に必ず導き、神様の御国を見上げともに歩む家庭となるよう望んでおられるので、そのような祝福を必ず許して下さいと信じます。神を信じ、救われるのには、何の資格も、差別もありません。救い主なる神様は、家族の中一人だけではなく、その家族みんなを愛され、家族みんなを救おうとされるお方であることが分かります。

「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。(使徒の働き16:31)」

主の約束は“あなた”で終わりません。ノアの洪水時代の裁きを定められた神様は、それにもかかわらず、神を信じ、従うノアに救いの箱舟を作ると命じられ、神様はこう語られました。

「あなたとあなたの全家(家族)は箱舟に入りなさい。(創世記7:1)」

信仰の親、信仰の夫、信仰の妻、信仰の子供がいることが決して当たり前のことではありません。ある方には、一生の願いであり、人生の一番望んで、切実に待ていらっしゃる祈り課題であります。家族のみんなが神を信じ聖書の神の約束通り救われている家庭は一生神の前で感謝すべきでしょう。そして、まだずっと忍びながら、その祈りの答えを待っている方々は、あなたを先に信じさせ救って下さった神様が必ず、一人から全家族にも真の神様を知り、信じ救われる時が来る事を信じ、その時が成し遂げられるまで神様の御手に委ねつつ祈り続けましょう。

証し)私は妻が結婚の前に泣きながら告白したことをいまも覚えています。22年前1998年当時、婚約者だった妻が3年間教会の棚橋真之介さん、恩恵さんが今働いていらっしゃる日本キャンパススクールセード(CCC)という大学生宣教団体の日本宣教師として名古屋来る前に、ある日私の両親にあいさつをするために尋ねました。私の両親は日本に今の妻を宣教師として送る前に一緒に神様に礼拝をささげようと提案し、夕食後に、家庭礼拝の時間を持ちました。ところが、妻は、礼拝の初めから最後までずっと泣きやみませんでした。私はその理由が分からなかったのですが、礼拝が終わってから、彼女はこのような告白をしました。“私の一生の願いと祈り課題の一つが、信仰の家庭、クリスチャンホームで家族と一緒に信仰生活をするのですが、神様が今日その願いを聞き入れてくださったことに感激し、神様に感謝し、感動して、あまり涙が止まらなかった”との言うことでした。正直、3代目の信仰の家庭の中で育てられた私としては、家族がいっしょに家庭礼拝をすることって、あれだけ感動し、泣きやまないほどのことなのか正直に共感できませんでした。今は妻の両親も変えられましたが、妻の学生時代、教会に行こうすることで殴ったり、聖書をやぶり、いわゆる迫害のある家庭で信仰を守って来た妻にとっては何よりも、神の一番の祝福は、家族がみんな共に礼拝し、共に祈る、共に真の神様を信じ愛し、信仰の生活することだったのです。それがどれだけ尊く、大きな家庭への祝福であるか、妻はよくよくそれを求め、祈りつけ、知っていたのです。

今日の本文に証しされているコルネリウスの信仰の素晴らしさは、自分だけではなく、神の御言葉を共に聞き、共に恵み、祝福を頂けるように、自身以外の家族、周りの人々にも声をかけ、気を配っていたことが分かります！本文33節を見ると、使徒ペテロを招き迎えながら、神の御言葉を聞ける大切な時に、みんなに声をかけて家に集めさせていたことが分かります。

「今、私たちはみな、主があなたにお命じになったすべてのことを伺うとして、神の御前に出ております。(33節)」

神に祝福される為、子どもたちの為に、親は子供たちをまず、神の御前に出られるように勧め、導かなければなりません。神の御言葉を家でも読み、家族と共に神の御言葉を読みながら、神の御言葉を聞かせ、いつも神の御前での人生であ

る事を悟らせて下さい。後で、45節から48節まで見ると、御言葉を聞いた全家族、全て集まった人々の上に聖霊の神の賜物が注がれ、ペテロを通して、その場で、みんながイエス・キリストの御名によってバプテスマを受けられたと書かれています。「48ペテロはコルネリウスたちに命じて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けさせた。」

コルネリウスの家庭はまだ、旧約の神様のみを信じ、はっきりイエスキリストの福音について知らなかったようです。そのため、神は使徒ペテロを送り、コルネリウスを含め、全家族と共に、集まっていた全ての人々に神の御子イエスキリストの十字架の救いの御業、復活され、信じる全ての者に神の御救いを、永遠の命を与えて下さる福音を聞かせ、みんな信じ、救われるように神様は働き、導いて下さいました！ハレルヤ！今も生きておられ、すべての者が救われるのを望んでおられる神様が、必ず、祈り続けるみなさんの全家族もキリストを心に受け入れ、洗礼を受け入れる救いの日を許して下さいます。

一世代目には色々覚悟することも、かなりの忍耐も必要かも知れませんが、すでにみなさんを先に信じさせ、神の救いを与えて下さったその神様がみなさんの全家族をも救い、クリスチャンホームとさせて下さることを信じます。アーメン！

<2. コルネリウスは信仰を実践していたからです。(2-4節・22・30-31節)>

もう一つ、考えて見たいことは、コルネリウスの家庭が神様に祝福された理由は心で信じただけではなく、実際日々の生活の中で、信仰を生かし、信仰を立たせ、信仰によって、実践が伴っていたことが分かります。コルネリウスの家庭には二つの窓が開けていたと思います。一つは神様にむかっけて開けていた窓を持って、もう一つは隣人にむかう窓が開けられていたと思います。この二つの窓が開かれていた家庭だったので、コルネリウスの家庭はさらに祝福され、日々生きておられ、共におられる神を体験することが出来ました。つまり、天に向かって開かれた窓をもって祈りを持って神様と日々親しく交わり、隣人に向かって開かれている窓をとおして隣人をかえりみ、分け与え、仕える愛のほどこしがいつも伴われた家庭であったことを、聖書を通して分かります。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！信仰生活とはいったい何でしょうか。

“神様と隣人との愛の関係を保ちながら生きること”だと思います。聖書でイエス様が旧約の全ての律法をまとめて下さった一番の戒めは何でしたか。ルカの福音書10章27節でイエス様はこう言われました。

「『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい』、また『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』とあります。(ルカ10:27)」です。神への愛、隣人への愛、これがイエス様が強調された神様が信じる者たちに与えて下さった一番の戒めであり、律法でした。

すると、愛するという意味は何でしょうか。私は愛が持っている本能的な二つで説明できると思います。

一つは、愛すると一緒にいたくなり、そしてもう一つは愛する人のためには惜しまず何でもあげたくなることではないでしょうか。

<①コルネリウスは祈りの人でした(3-4節・30-31節)>

神様をまことに愛するなら、神様とともにいることを好むでしょう。みなさん、みなさんと私が今どれだけ神様を愛しているのかを実験して分かる方法があります。みなさんが最近どれだけ、神様に祈るの生活を保っているのかをさぐって見ることです。祈るということは何でしょうか。私は祈りという単語の一番大切な定義は“神様とともにいること”だと思います。何かを求めて得られるかが祈りの全部ではありません。もちろん、それもあると思いますが、祈りとは神様と向き合う時であり、神様とともにいる時間、神様と会話し、交わる時です。

いつも祈りに対するルター先生の姿勢は今日いつも忙しく日々を過ごしている私たちにチャレンジとなります。

“とっとも忙しい。あまりにも忙しい。だからこそ、私はもっと祈らなければならない。”これがルター先生の日記に書かれた文章です。祈りの十分の一をささげることを中心に、一日中2時間24分間は、神様にひざまずき、全能なる神様との深く交わりを保っていたからこそ、神に当時ドイツとヨーロッパを、そして、眠っていた世界の主の教会を目覚めさせるよう用いられたマルティン・ルター先生の祈る生き方は今日の私たちにも大切なチャレンジとなっています。

コルネリウスの家族は神様に向かっていつも開かれていた窓を持っていました。3-4節に彼は一日中祈る時間を決め定義的に祈りながら、神様と交わっていたことが分かります。「3ある日の午後三時ごろ、彼は幻の中で、はっきりと神の御使いを見た。その御使いは彼のところに来て、「コルネリウス」と呼びかけた。4彼は、御使いを見つめていたが、恐ろしくなって、言った。「主よ。何でしょうか。」すると御使いはこう言った。「あなたの祈りと施しは神の前に立ち上がって覚えられています。」、30-31節にも、「コルネリウスが言った。「四日前のこの時刻に、私が家で午後3時の祈りをしていますと、なんと、輝いた衣を着た人が私の間に立って、31こう言いました。『コルネリウス。あなたの祈りは聞き入れられ、あなたの施しは神の前に覚えられています。』」

午後3時は、彼がいつも祈っていた時間でした。彼は日常生活において定期的な祈りの時間を持っていたことが分かります。言い換えると、彼はどんなに忙しくても、どんなに昼間が暑くてもゆずれない祈りの最優先順位を保っていたことが分かります。自分のやりたいことをやって、残りの時間、余っている時間に祈ろうとすると、一生神の前で深く祈ることが出来ません！コルネリウスは神様に祈り、聞き従おうとしていた敬虔な人でした。なぜですか。信じていた神様を力を尽く

し、命を尽くし、知性を尽くして、心から愛していたからです。

②コルネリウスは神様から与えられた愛を、隣人に惜しみなく分かち合い実践した人でした。(2・4・22・31節)

隣人はだれですか。イエス様はある日強盗(ごうとう)に襲(おそ)われた人を助けた良いサマリア人のたとえをとおして、我々に隣人とは自分の近くに住んでいる人ではなく、自分の助けを必要としている人なら、自分が助けるべきすべての人が自分の隣人であることを教えてくださいました。たまたま人を助け、ほどこしをし、救済したのではありません。コルネリウスと彼の家庭は自分の持っている信仰、自分の持っているものが神様から与えられていると信じ、聖書に神様が喜ばれる通りに従って、喜んで分け与える家庭でした。あまりあまっているからではなく、自分たちに与えられたものがきつと神様からの恵みとして、受け止めて信じていたからこそ、回りに分け与え、助けが必要な人たちの為、心から施す生き方を大切に保つ家庭となったので、神様に、そして、ユダヤ全体に認められ、褒められていたことが分かります。

「2彼は敬虔な人で、家族 全員とともに神を恐れ(かしこみ)、民に多くの施しをし、いつも神に祈りをささげていた。」そのため、4すると御使いはこう言った。「あなたの祈りと施しは神の前に立ち上がって覚えられています。」22すると、彼らは言った。「正しい人で、神を恐れ、ユダヤの民全体に評判が良い百人隊長コルネリウスが、あなたを自分の家に招いて、あなたから話を聞くようにと、聖なるみ使いから示されました。」31こう言いました。『コルネリウス。あなたの祈りは聞き入れられ、あなたの施しは神の前に覚えられています。』

神様を心から愛し信じる人々は、自身の周りにいる兄弟姉妹、隣人たちを顧みます。自分に与えられている社会の地位や立場、力、時間、物、お金など全てを用いて人を愛し、人を助け、人々に分かち与える者、その家庭こそ、神様がさらに与え、満たして下さる祝福の秘訣を体験できると信じます。

ルカの福音書6章38節「与えなさい。そうすれば、あなたがたも与えられます。詰め込んだり、揺すって入れたり、盛り上げたりして、気前良く量ってふところに入れてもらえます。あなたがたが量るその秤(はかり)で、あなたがたも量り返してもらえますからです。」

ヤコブの手紙1章27節「父なる神の御前でよく汚れのない宗教とは、孤児ややもめたちが困っているときに世話をし、この世の汚れに染まらないよう自分を守ることです。」

<3. コルネリウスの家庭が受けた祝福>

何よりも神様はコルネリウスの信仰と祈りと施しを受け取ってくださって、覚えてくださったと聖書は記録しています。(4・31節) 祈りがきかれる祝福、私たちの祈りをいつも聞き入れてくださる神様の御力によって毎日助けられ、天のとびらが開かれる祝福はどれだけ私たちが慕い求めべき祝福でしょうか。

4・31節にも「あなたの祈りと施しは神の前に立ち上がって覚えられています。」と書かれています。これがまさにコルネリウスに対する神様の評価でした。神様に認められる信仰！まったく神と関係なく、神を知らなかった彼の人生でしたが、真の神を知り、信じてからは、神の御言葉通りに、神様が命じられた通に従って結果、神に喜ばれ、認められ、コルネリウスと全家族がイエスキリストによって洗礼を受け、救われ、さらに大いに祝福されました。

この祝福は単なるコルネリウスの家庭の祝福でとどまりませんでした。コルネリウスの家庭を通して、さらに周りの人々とユダヤの民たちも助けられ、イスラエル民族以外のほかの民族と国々に神の宣教が開かれ始めるきっかけとなりました。そして将来ローマにある神の教会が建たされる時に、彼の家族はきっとすばらしい火種と土台となったはずですが、それだけではありません。

AD313年、ローマ皇帝コンスタンティヌス1世のミラノ勅令により、キリスト教が公認され、392年大ローマ帝国がキリスト教を国教(こっきょう)とするまで、始発点となったのに間違いありません。神様の御前で敬虔に生き、生きておられる全能なる神様の御前でいつも恐れかしこむ謙遜な信仰を持っていたコルネリウスを通して、彼の全家族が救われ、全家族が神様を愛されただけではなく、その神様の祝福と愛を分け与えることに力を注いだ結果、町が変わり、このコルネリウスの家庭を通して、やがて主の教会がローマに建てられ、自分の民族が変えられ、世界中に福音が広がる祝福と祝福の通路として大いに用いられました。

今日も礼拝に集っていらっしゃるクリスチャンプレイズチャーチの信仰の全家族にもコルネリウスの家庭のような祝福がおとずれるように切にお祈り申し上げます。みなさんの人生、家庭と我々の教会が神の愛と祝福の通路として用いられますように！みなさんとみなさんの家庭、家の教会が神の福音の通路となってますます大いに用いられ、みなさんの周りが変わり救われ、この日本民族が変えられ救われ、コロナで苦しんでいる全世界が神様の愛と福音によって変えられ、救われますように主イエスキリストの御名によって祝福します。アーメン！